

六 民謡・伝説・方言

現在は、文字をもつて表現されることが多いが、昔はことばを持って伝承されることが一般的であった。伝説・昔話・ことわざなど、語りつがれてきたものと歌いつがれてきた民謡がある。口伝による世代間の伝承は、数世代が同居していたころと生活環境が大きく変わり、今日のような核家族化ではむつかしくなってきた。

(一) 民謡

民謡は庶民の生活感情を歌いこんだもので、それぞれの生活の場で生まれたものである。それは労働の場であったり、祭りの場であったり、あるいは祝事や遊びの場であったりした。現在、有名民謡は流行歌化して愛唱されているが、地方独自の民謡は次第に忘れられようとしている。代表的な民謡について若干見てみよう。

1 労作歌

農業や漁業の仕事のほか、酒造などの諸職に関わる人たちの間で歌われるものがある。疲れや退屈さを紛らわ

せて仕事の能率をあげるために歌われる。労作歌の多くは基となる仕事の仕方や内容が変わったり、仕事自体が無くなってしまうものもある。

(1) 石つき歌

家を建てるときの基礎固めをするときに歌われるものである。石つきには多数の人力を要し、かつ力を合わせる必要がある。歌は労働能率を高めるために歌われるものであるので、掛け声のような囃し詞が中心になっている。

ハ アーレワ アリヤリヤコリヤリヤン ヨーイトコ ヨーイトーコナー アラホーランエ
コラ 祝いめでたのヤーハンエ アラヤストコセーヨイイヤナー
めでたの若松さまよ ヨーイトナー
アーレワ アリヤリヤコリヤリヤン ヨーイトコ ヨーイトーコナー アラホーランエ
コラ 枝も栄えてヤーハンエ アラヤストコセーヨイイヤナー
栄えてソラ葉もしげる ヨーイトナー
アーレワ アリヤリヤコリヤリヤン ヨーイトコ ヨーイトーコナー

民謡

(2) 新地節

有明海沿岸一帯の豊かな土地はすべて埋め立てによるもので、先祖たちが汗を流した干拓事業の成果である。

当時は現在のように近代的な機械による作業ではなくて、すべて手作業による難工事で、少しでも楽しく作業をするために労働歌が生まれた。

〽新地主堤から沖島さん見れば 可愛いコラシヨ

お春ちゃんが渦にのう

どうして新地にや来た ロレロン

難儀のつらさに来た ロレロン アラサ アラサ

(3) 酒造歌

日本酒は複雑な作業をへてできあがる。できあがるまでにはたくさんの方があり、昔はすべて杜氏の経験と勘による手作業であったので、作業に応じて歌があった。

もつき歌 蒸し米、酵母、水を加えて混ぜるときに歌われる。

〽やれよンヤンコンヤンコ

胸に鈴さげては春はこがれよ 伊勢さまへ それなし参りても 御本社が知れぬ

どちら御本社を拜むやら それなし参りつめ げんごさまへ行く

お家かやぶきやみな本社 やれよー御本社したら 何というて拜む

とかく主さん詣でなよ

添えつき歌 もと麴、蒸し米を混ぜるときに歌われる。

〽今がはじまりはじまりました アーヨイシヨ ヨイシヨ

銘酒酒屋の添えつきが

酒屋男は花ならつぼみ アーヨイシヨ ヨイシヨ

今日も咲け咲け明日も咲けよ

銘酒でるでるひのくちがでる アーヨイシヨ ヨイシヨ

でる銘酒は窓の梅よ

(窓の梅酒造にて)

2 座敷歌

宴席で楽しまれる歌で、洗練された歌詞と曲調を持っている。

(1) 梅ぼし

佐賀の花柳界で歌われたもので、節回しはむつかしく民謡というより端唄に近いものである。

〽しわはよれども あの梅ぼしは 色気はなれた粋な奴

わたしや青梅 ゆり落とされて しそとなじんで赤くなる

なにをくよくよ 川ばたほたる どこのはずみで消えたやら
年は二十代 わが年ともに いじょうとどかぬことばかり

(2) 相撲甚句

歌詞には地方の名所などを歌いこんだものが多く、近年も盛んに新しい歌詞がつくられている。相撲甚句に合
わせて、女性により相撲取り踊りなども行われている所も多い。

へエーアドスコイドスコイ

ゆんべ夢見た大きな夢はネ 青空天井笠にさし 奈良の大仏さんを腰にさげ

音に名高い九州は 桜島なる噴火山

うまい うまいと食べたなら 近江の湖水を一すい 二すいと飲みほせば

なにやらのどにかかったので ゴホンゴホンとこずいたら

潮のたか橋や ヨホホイ エーエ飛んでたよ

アラ ドスコイドスコイ

へエー アラドスコイアラドスコイ

佐賀の営所ばほめるじやないがナー

家の造りは異人館 四方八方ガラス窓 出入口菊の紋

中に住もうた兵隊さん 夜は五尺の箱の中 毛布の布団にやすまれて

朝は六時にラツパに起こされて 七時のラツパで食事する 一歩前 二歩前

暑さ寒さもいとわずに こうしてももうた日給で 今宿女郎ばさして行く

酒ばごぶごぶ飲むうちに 雨がジョジョ降ってきた コレコレモシねえさんや 傘を一本貸してくれ

コレコレモシ兵隊さん あなたの規則は知らないが 私は月に三度の検査でアコラサノサ

あなたに貸す傘ヨホホイ エー無いでしょ エー

アラ ドスコイドスコイソレデモ歌かい

無かよりやまじだよ 知らん者なだまっちよれだまっちよれ

ア ドスコイドスコイ

3 たんす長持ち歌

戦前までは、嫁入りに先立つての道具送りに、たんす長持ち歌を歌いながら運ぶ風景が見られた。出発、道中、
到着と場にに応じて歌われる。

へアー所望しよぼうとナーヨあるなら アーやらねばならぬ 一人ナーヨ娘にエーのしつけてナヨー

アーさらばナーヨたちます アーご両親さまヨー 長のナーヨーお世話に エーなりましたナヨー

アーたんすナーヨ長持ちや アー受け取りました 奥のナーヨ納戸にエー納めますナヨー

アーたんすナーヨ長持ちや アー受け取りました

4 子守歌

親や祖父母が幼児を寝かせつけながら歌うもので、ゆったりとした口調で歌われる。歌詞はたいへんユニークなものである。

べしつちよこ はつちよこ ねんしやいよ はよねんねしんしやいよ

蜂や山みや 巢つぐいぎや 巢はつぐらじ 嫁ごみぎや

嫁ごはどつした 嫁ごかん びんつけ かねつけ よか嫁ご あしぢやなれば ばけ嫁ご

はよ 寝んしやい 寝んしやいよ

(二) 伝説

口伝えによつて世代から世代へと伝承されてきた物語に昔話がある。「むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが」と語られるが、いつ、どこで、だれかが明確でない。一方、具体的に時代や場所、人物名や物などをあげて語る伝説という物語がある。山・川・森・岩・樹木などの自然、また、城・堂宇・社などの建造物によせて、あたかも事実のように語られてきた。伝説は事実ではないが、地域では歴史として語られてきた

面をもっている。

1 矢櫃の森と香椎宮

高倉天皇の安元元年（一一七五）、窪田の地頭因幡守藤原利常は諫言により、筑前国香椎に塾居させられた。利常は深く香椎宮を尊信し、一日も早く其の冤罪が解けることを祈り、その願いが成就したときは、窪田郷に香椎宮を勧請し永く祭祀することを誓った。

その願いがかない、ほどなくして罪を赦されて窪田に帰ったある夜、筑前国香椎宮より白鳥が飛んできて、庭に降り立った夢を見た。不思議に思った利常は、翌朝起きて庭先を見ると一本の白羽の矢が突きささっていた。これはまさしく香椎の大神のお告げと、矢を石櫃に納めて、西南にある森の地中に深く埋め、使いを筑前香椎宮に遣わし、分霊を請けてきて、この地に香椎宮を建立した。その後、香椎の宮はたびたび火災により焼失したので、現在の地に改めて遷座し、産土神として信仰されるようになった。矢を納めた櫃を埋めた森は矢櫃の森と呼ばれるようになった。

2 得仏

聖武天皇の御代、天平年間（七二九―七四九）、僧行基がこの地を訪れたとき、不思議な靈験により仏像を得た。

行基は寺を建立し、仏像を祀ると村人たちはこぞって礼拝をした。また、度々水害に悩まされていた嘉瀬川の堤防も修理してくれたので、村人たちはこれこそ、生仏の授け給う得であるといつて、村の名を得仏と称し、堤防を得仏土井といつて永くこれを記念した。

3 沖祇大明神

慶長年間（一五九六—一六一五）、一人の年老いた漁師が、毎日、漁にでは、今の神社の辺りに舟をつないで上陸するのを習慣としていた。いつも舟でそこまできると葦のなから光るものがあつたので、上陸地点を間違ふことはなかった。老漁師は沖の島さんを熱心に信仰していたので、その神さまの霊がその地に降りてきて導いたのだらうと評判になった。

あるとき、領主の龍造寺政家公が巡視にこられたとき、その話を聞き、感心してこの地に神社を建立して、沖祇大明神を祀つたと伝えられている。

4 福地ノナの最期

戦国時代の北九州は、龍造寺隆信が支配をしていた。ところが天正十年（一五八二）島原の有馬氏は隆信に従わず島津氏と通じたため、天正十二年三月二十四日、隆信は二万五千余りの大軍を率いて、有馬・島津の連合軍

を島原に攻めた。

島原沖田畷の戦いは兵力で圧倒的に優位に立っていたが、運命の神は隆信には味方せず、龍造寺軍は散々に打ち破られていた。覚悟を決めた隆信は、自害をしようと腰をおろしたが、側近の家来たちも散り散りになり、側には小姓の鳴打新九郎、田中善九郎、福地千などが従っていた。三人とも一六才の若武者であった。福地千は、千の字を上下に分けるとカナのノとナになることから、ノナと呼ばれていた。

隆信は三人を呼び、手ずから己れの髪を切り、それを分け与えながら、「お前たちは、まだ歳も若いので、今この戦場を逃れて国へ帰つても誰も卑怯者と罵りもしないであろうから、早くこの場を去れ」と、云いきかせた。しかし、三人は隆信のいうことを聞かなかつた。

まず、鳴打新九郎は、「殿のお言葉はたいへん嬉しく存じます。しかし弓矢とる武士が主君を見捨てて逃れることがどうしてできません。私は殿の前で立派に討ち死にをしますので、お許しください」と、一礼して家来と一緒に、島津勢の中へ斬りこみ、壮絶な死をとげた。それを見た田中善九郎と福地千は、涙を流して、

「私たちも鳴打に遅れをとつてはなりません。私ら二人、殿の死出の御先をいたします」と、鳴打同様、島津勢に斬りこみ、最期をとげた。これを見た隆信は、もうこれまでと、



福地ノナの碑 悲壮な最期をとげた若武者 福地千の縁故方により、明治十七年に建立された記念碑 (龍願寺境内)

「龍造寺隆信これにあり、首打つて手柄にせよ」と声高に呼ばわつて、腹に短刀を突き刺した。その首は島津の侍大将河上左京亮が討ち取った。

悲壮な最期をとげた三人の若武者のうち、福地千の縁故者により、明治十七年に龍顔寺に記念碑が建立されている。

(三) 方言

方言というのは、共通語に対応しての言い方であるが、私たちは共通語と、生活している地域社会で使用されている方言を両用している。現在はテレビや新聞、雑誌といったマス・コミュニケーションや交通機関の発達で各地との交流が盛んになり、共通語が浸透し、方言といわれる土地特有のことばが使われることが少なくなった。

しかし、改まった公的な場では共通語を、ふだんの私的な場で話を交わすときには方言混じりといった、場に応じて使い分けているのである。

大正時代の学校教育では、できるだけ方言を使用しない教育がなされていた。標準語励行を進めるために職員室の正面に「方言をつかわないことーあさん・こつ・ほう・えー・わがー」という額が掲げてあった。

1 久保田のことば

『佐賀の方言』（志津田藤四郎）によると、佐賀方言地域を、東部方言（ヒガシメ方言）地域と、西部方言（ニシメ方言）地域との二つに大別できるといふ。当町は「ヒガシメ」のうちに属する。

かつて生活の中で使われていた久保田のことばとして、広報『くぼた』に、馬渡力氏が連載されたものの一部を紹介しておく。

童、このことばがびつたりする昔の子どもたちだった。服装は、着物（和服）、制服、セーターなどは肘も膝もふせが当たっていて、履き物の運動靴は破れて親指が顔をのぞかせ、踵はひしゃげている。下駄のすり切れたもの、草履は片がたであったり、裸足もいる。

どの子を見てもスクスノー（満足）な者はいない。だがそんなことは一向に気にしていない。今とは違って、テレビゲームや漫画を見て家で遊ぶといったことはなかった。

車といえば自転車、シャリキ（大八車）、リヤカーそれに馬車がガラガラ音を立てて通り、間には人力車がお客や花嫁さんに乗せて来た記憶がある。

そうした家の前の道路には、子どもたちの元気な姿と、歓声に満ちた遊び場だった。

K おーい独楽スッポー（するよ）

A オイ(僕)もカタツポ(入るよ)

K Bはコンヤッコ(来ないね)

A Bはチョージー(便所)にイタテクツテ(行つて来ると)

K ネットカラ(いつまでも)コンヤツカ(来ないな)ダイジャイ(だれか)迎えーイタテ(行つて)こい

A オイ(僕)が行く

K ありやBヨイ(は)ワサンナ(君は)ドツカラ来タコー?Aが迎えー行タトコレ(行つたのに)

B 裏から来た:

K ナイコ(何んだ)どじょうのミツツングリユー(行き違い)したバイニヤー(んだなア)さあ、スツパイ

(全員)来たナイバ(なら)始むツポ(よ)

B Cちゃんワサン(君は)は独楽は?

C 持ツトツポ(持っているよ)ほらツクラ(ふどころ)ンナキヤー(中)ほら

B オリョー(わー)アパシヤン(新品)ジャッコ(だな)、前エ持ツトツタトハ(持っていたのは?)

C うん、ヘツツー(くど)さんのトコレー(ところに)エートツタギー(置いていたら)姉ちゃんがシラジ

ー(知らずに)ツンムヤシトツ(つい燃やした)ソイケン(だから)アパシヤンば買った。さあ、ヤロイ、

ヤロイ

イチワイコキワイ、モドシナシ(割れても失くなつても戻さない)

ポーニヨツテ、モーチャモーチャ、キンキンモツテ、シヨイ

掛け声は「イチ、二の三」でも、「ヨーイドン」でもしまらない。掛け声を合図に一齐に独楽は地面目がけて投げ下ろされた。

ブーンとうなり音を立てて右に左に跳ね回っているうちに、やがて一点に静止した。

「座った、座った」と歓声、しばらくして独楽は頭を振り始めたら「ドトツタ、ドトツタ」。早く回転を止めた

者が負け。

順位が決まれば、

ダイコー(だれかね)一番下の者んは早くモセ(回せ)

K Bジャッコ(だよ)早うモセ

A は一番先きイイケ(攻撃せよ)

A よーし、ソイナイバ(それでは)イクぞ。よいしょ、ありやー、ヤイソクノータ(失敗した)

K コンダ(今度は)、アパシヤン持つとるCの番だ

C よーしオイ(僕)がイク(攻撃だ)。ユー(よく)見とけ、ヨッケンジャー(横へ跳ね飛ばす)ぞ。どこが

シイトツカ(好きか)、小便瓶か…ヨカンシタ(床下)か、独楽のゴチャー(体)に当たらんゴト(ように)

シトカンバ(しとくように)ヤーマチ(けが)スツケンニヤー(するぞ)。

B は早くもゴールキーパーの構え。昔は小便瓶は軒下の隅に埋めてあった。

床下は、表から裏へ筒抜けになっていた。オンジさん(年配の男の人をこう呼んだ)たちが二、三人寄つて来て、モーデン(今にも)ウツカングツ(壊れそうな)バンコ(縁台)を引っ張り出し、並んで腰掛けて、腰の煙

草入れからキセルを抜いて、刻み煙草（はぎなでしこなど）を詰めて火打ち石をカチカチ打って、煙草に吸いつけスパスバ煙りを吐きながら「喧嘩独楽」の観戦？だ。Cは頭上に独楽を振りかざし、体を斜めに構えて力まかせに投げ下ろした。「カーン」と音を響かせて：Bの独楽はヨカンシタへふっ飛んだ。観ていたオンジさんが、

上手ニヤア（だな）、おいどんもわらべの時は上手ヤッタボー（だったよ）

と、言つて、煙が目には沁みたような顔をして遠い子ども時代を思い起こしたようだ。

キセルに残った火のついた煙草の吸い粕を、左手の腹にフツと吹き出して新しく煙草を詰め替え、左手に乗せた火種から吸いつけたのを横で見っていたハナタレ小僧が、タマガツ（びっくり）て

オンジさん熱うなかノマイ（ね）、マイツチャー（もう一度）して見ンサイ（してください）

と独楽より面白そうだ。

飛ばされた独楽を追つてヨカン下から出て来たBは、

ナイモカンモ（何と言う事か）ヨカン下ニヤア（には）、オロイカ（古い）ジャーモク（材木）テン（や）ナ
ーンカ（長い）竹テン（やら）ヤイバナシ（たくさん）入れてあつた。オマケー（そのうえ）、猫のたばき（嘔吐
物）テン（や）イン（犬）の糞テン（やら）有つて臭かつたボー（よ）。そおしてヘツツーさんでナイジャイ（何
か）煮ヨンサツタ（煮ておられた）オバツチャン（年配の女性）が、オイバ（僕を）イン（犬）と間違ゴ一テ
（がえて）またイン（犬）のキヨツバイニヤ（来ているのだな）と言つて「シーシー」言いながらヒバイダケ（火
をあせる竹）でジータ（地べた）バ（を）たたきヨンサツタ（たたかれた）。オリヤア（僕は）おかシュー（しく
てアブニヤア（うっかり）吹き出そうデ（と）した。

K ナイコー（なあんた）、ツラ（顔）はコブ（蜘蛛）の巣だらけジャツコー（だよ）

B コンダー（今度は）オイガイタテヨカジャロー（いつてよいだろう）、ハヨモサンコ（早く回せ）。見て
ミサイ（見る）、オイがヨイソ（独楽を回す紐）はヨカローが（いいだろう）。コリヤア（これは）麻ばオ
トツタン（お父さん）がヨコツツ（横槌）で打つてヤワルー（柔らかに）してノー（綱つ）てクンサツタ
（くたさつた）ケン（から）、ツキヤア（使い）良かボー（よ）

ヨイソ（燃り紐）次第で独楽はよく回る。農家の父親は稲わらをヨコツツで打ちこなして燃り紐を作つてく
れた。Bは、野球のピッチャーが投球する時のようなポーズで、ちよつとモーションを掛けて真下の独楽へ振
り下ろした。「ドサツ」とにぶい音がして、的独楽は即止した。

バンコで見ていたオンジさんが、

ダイデンジョーズニヤア（みんな上手だなあ）、童のジブン（頃）をオメージャータター（思い出したよ）。さ
あ帰ろうかニヤア（ね）

と言つて吸っていたキセルをフツと噴いた。スポンと軽い音がして、煙草の吸い粕は一層ほど飛んだ。さつき
から好奇の目で見ていたハナタレコーズ（小僧）は、手の腹灰皿のオンジさんが棄てたい粕に近寄りいたずらつ
ぽく指先でつまんだ。「アツ」と悲鳴を上げて泣きつ面。これを見たオンジさんは、

ナイシヨッコ（何しよると）、ヒヤマチ（火傷）スツポ（するよ）。童はヒジャーケ（火遊び）スッキ（すると）、
帰つてから小便シカブツポ（寝小便するよ）

方 言
とユーユー（言いながら）バンコを片づけた。

子どもたちはユールシ(夕方)になるのも知らぬげに、丁々発止と鍋しるべを削っていたが、

A もうセンボ(止める)

B ナシー(なぜ)

A 馬うまン(の)草切イギヤー(切りに)行カンバランケン(行かなくてはいけなから)

B ワサンナ(君は)、ウマンガシギシ(毒草)は知ットッコ(ているか)

A 知ットックソー(知っているよ)、アイバチーカススキ(あれをうっかり食わせたら)馬のチーシンラシカ
(死しんじまらしい)

C オイも帰ろう

B ワサンモヤ(君もや)

C ウン、モヤ(共同)風呂当番ヤッケン(だから)風呂水バ(を)汲マンバラン(ねばならぬ)

当時は、五・六軒がモヤ風呂だった。

B オバツチャンのオンサロモン(おられるだろう)

C オンサツパッテン(おられるが)イタマキヤートンサツ(病気だ)、お医者さんの時々来ヨンサツ(来てお
られる)

当時は、医者が病人の家に往診治療した。

B Eはナイデンセジヨカ?(何もしなくてよい?)

E インニヤー(いや)弟ばモイシヨツポ(子守をしている)

B オバツチャンはオンサロモン(おられよう)

E オトツタンとフチャイ(二人)でドコサイジヤイ(どこかえ)馬見ギヤー(に)ヤッケン、(だから)弟は
ハンズーカブセライトツ(留守番、置いてけぼり)

この馬見は、娘さんを見に行くこと(嫁さがし)。向こうに行つて

馬ば見せてクンサイ(ください)

と言つと

ナーイ(はい)一人オツケン(おりますから)見てクンサイ(ください)

しばらくしてアップベンベン(綺麗な着物)にシヤエ(着替え)て、チャーガツカゴト(恥ずかしそうに)し
てお茶をフンミヤー(ふるまう)した。

2 語彙

ア行

アカギヤー 赤貝
 アサイギヤー あさり貝
 アシチャー 明日
 アツケン あるから
 アップベンベン 幼児語で、きれいな着物
 アバク はいる
 アパシヤン 新品
 イオ 魚
 イツジャイ いつか
 イツチヨン ちつとも
 イヒューカ ふうがわり
 イナマキ 米藁で編んだ筵むら
 イン 犬

ウシツツ 捨てる
 ウツカンガス 壊す
 ウドンコ 小麦粉
 ウランクチ 裏口
 エスカ おそろしい
 オイ 僕
 オカサン お母さん
 オコモジ 菜漬け
 オズム 目覚める
 オツケヒツコム おじけづく
 オトツタン お父さん
 オトボー 末っ子
 オドラカシ 案山子かかし
 オモテンクチ 玄関
 オロツク 急ぐ
 オンチョー 雄
 オンボサン おばあさん

カ行

カセイ 手伝い
 カテ おまけ
 ガネブーブー こがね虫
 カラマ 小潮
 カンゲキー かみぎり虫
 キチキチ しょうりょうばった
 キチャガラス かちがらす(鳥)
 キヤーキヤー 貝
 キヤーツグロー かいつぶり
 キヤーフ ゆもじ・けだし
 キユウ 今日
 グゼゴト 小言
 クチナワ へび
 クツゾコ くちぞこ
 クラスツ 叩く

クルウ 叱る
 コウブイ こうもり
 コーサ 薄い焼き物のフライパン
 ゴチャー 体
 コチヨ 猫
 ゴツカブイ ごきぶり
 コブ 蜘蛛くも
 コマカ 小さい
 サ行
 サルク 歩く
 シイド 川
 シーカ 西瓜すいか
 ジーット そーつと
 シカンニ 嚴重に
 シツキヤー 全部
 ジットー バッタ

方言

シブギヤー 慈姑くわい
 シヤエル おしゃれする
 シャービヤー 差出口
 シヤリキ 大八車
 ジャーモク 材木
 ショーチューゲーム あめんぼつ
 ジーダ 地面
 スイツケギ マツチ
 スガイ 蠟あぶら
 スクスノー 満足
 スズルツ 溢れる
 スツパイ 全員
 スラゴト 嘘
 セカラシカ うるさい
 セツカ 牡蠣かき
 ゼン お金
 ソイギニヤー そつすると

ゾウグイ たわむれ、じゃれ
 ゾウノワク 腹が立つ
 ソクシヤーカー 憎たらしい
 ソゼタ 痛んだ

夕行

ダイジャイ 誰か
 タカブクイ 高下駄
 ダゴマンチョー 手長えび
 タチャア 満潮
 タマガル びつくりする
 タンナカ たんぼ
 タンネル 探す
 タンボガラス はしぶとからす
 チキツト 少し、チカツトとも
 チャーガツカ 恥ずかしい
 チャーマシカ けだるい

方言

チャーラギ たいらぎ(貝)
 チョージー 便所
 ツキヤー 使い
 ツクラ ふところ
 ツツペーガイ 陸がに
 ツラ 顔
 テボ 竹ひご製の籠
 デンバツ 鬼蓮おたま
 テンゲー 手拭い
 トウマメ そら豆
 トゴエル おどける
 ドックー がまがえる
 ドッサイ たくさん
 ドツチャロー 中途半端
 ドヤオシ たくさん
 ドンポー どんこ(魚)

ナ行

ナイー はい
 ナキヤー 中
 ナシー なぜ
 ナワス しまう(かたづけ)
 ナーンカ 長い
 ナンカカル 壁などにもたれる。
 ニエー におい
 ニコン 二羽
 ニョーニョーカンジョー ままごと遊び
 ネットカラ いつまでも
 ネーズイ ねずみ
 ネネ 赤ん坊
 ネブル 舐める
 ノギヤー 野放し
 ノグウ 拭く

ノーナカス

失う

ヒヨーゲル

おどける

ハ行

バカウ

ヒヨースカス

おだてる

バーバシヤン

取り合う

ピンタン

端

ハヤ

兄さん

フウゾウ

れんげ草

パンコ

南風、ハエともいう。

フウタンヌルカ

まどろしい

ハンズーガメ

縁台

フーキヤ

しつと、焼く

ビー

飲料水を入れるカメ

フセコケ

つぎだらけ

ヒジャーケ

蛭

フトカ

大きい

ヒダルカ

火遊び

フチャイ

二人

ヒータレ

ひもじい、ヒダルーともいう

フンミヤ

振る舞う

ビツキ

臆病者おくびょうもの

ヘージ

返事

ヒノイツチンチ

かえる

ヘツツ

くど

ヒヤカ

一日中

ベーベ

魚

ヒヤア

寒い

ベーベタンジョー

めだか

ヒヤラズ

蠅は入らず

ヘボ

とんぼ

方言

ヤツキ

焼き菓子

ヤシニヤ

肥料

ワヤク

いたずら

ヤイバナシ

たくさん

ワイモト

干潮

ヤ行

モヤ

共同

ワ行

メカジャ

三味線貝

ヨコツツ

横槌

メンチョ

雌

ヨカンシタ

床下

ムツ

むつごろう

ヨカゴト

好きなように

ミツツングリユ

行き違い

ヨオイソ

昨晩

ミゾウ

かわいがり

ユールシ

攪り紐

マイツチョ

今ひとつ

ユールシ

夕方

マ行

仏様

ヤボ

やぶ

ホトメク

もてなす

ヤーマチ

けが

ホンノ

葦ゴイ(鳥)

ヤモ

やんま

ホトケサン

仏様

ヤーラシカ

かわいい

ホトメク

もてなす

ユルカ

柔らかい